

酒造好適米等の需要量調査結果概要及び 日本酒原料米の安定取引に向けた取組について

令和7年11月7日
農林水産省
農 産 局

本資料利用にあたっての留意事項

酒造好適米等の需要量調査は、酒造好適米の生産にあたり、各産地が需要に応じた生産を行う上での判断に資するものとして、酒造メーカーのご協力により、農林水産省が酒造好適米及び加工用米の需要量を聞きとったものです。

本資料においては、産地への判断指標として酒造好適米の全体の需給状況等を示すため、調査未報告分や年産ごとの供給過不足等を昨年実施した調査結果及び本調査結果により推計しています。

併せて、各産地銘柄毎についても需要量調査結果とともに、年産毎の増減を示しています。

なお、本調査結果は、主食用米の価格の高騰が続き、8年産の酒造好適米等の需要を酒造メーカーが見通すことが困難な状況下での調査であり、今後、変動する可能性があることに留意する必要があります。また、ラウンドの関係で計と内訳が一致しない場合があります。

今後も本調査を引き続き実施し、これまでの推計値や見込値を確定値に修正・検証してまいります。各産地におかれましては、本資料における指標を目安として活用いただき、日本酒原料米の生産及び実需の関係者が連携することにより、需要に応じた生産が行われ安定的な取引の拡大が図られることを期待しています。

酒造好適米等の需要量調査の概要

- 令和7年度調査は、以下により実施。
- 780社（約6割）、数量ベースでは約7割の回答があった（うち、令和6年度から引き続きの回答は574社）。

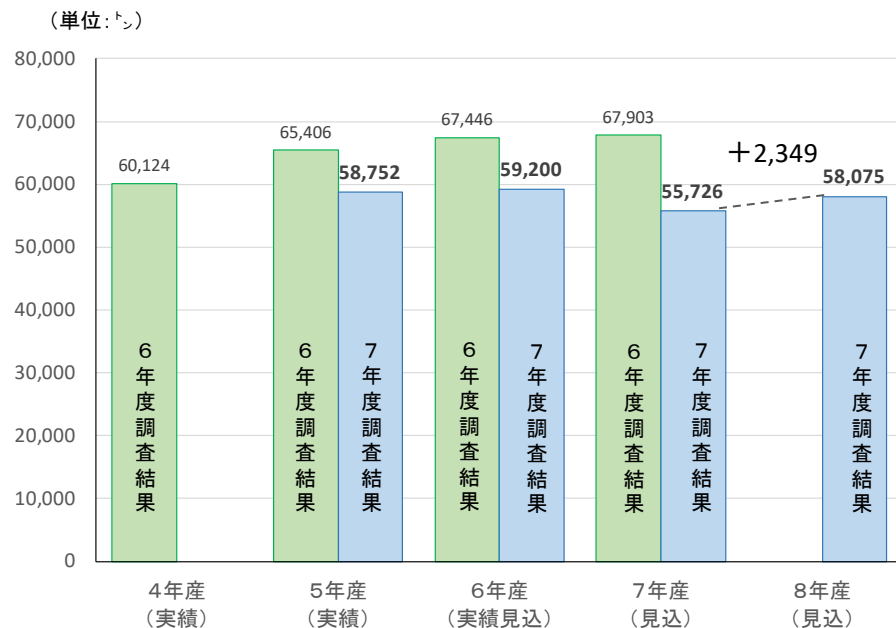
	令和6年度調査	令和7年度調査
調査目的	生産者が酒造好適米の作付判断や種子の確保を行う上で参考となる産地銘柄ごとの需要見通しを、目安として情報提供する	
調査対象	全酒造メーカー（1,205社 ^注 ） 注：清酒の製造を行っていないメーカーを除く	全酒造メーカー（1,228社 ^注 ） 注：清酒の製造を行っていないメーカーを除く
回答数	711社（59%） 回答率は数量ベースで81～83%	780社（64%） 回答率は数量ベースで73～74%
調査方法	調査対象に電子メールで依頼。日本酒造組合中央会会員向けHPに調査用紙（電媒）を掲載	調査対象に電子メールで依頼。日本酒造組合中央会会員向けHPに調査用紙（電媒）を掲載
調査項目	産地銘柄別酒造好適米及び加工用米の需要量並びに日本酒の輸出に関する情報 ・令和4年産購入実績 ・令和5年産購入実績（見込） ・令和6年産購入見込 ・令和7年産購入見込	産地銘柄別酒造好適米及び加工用米の需要量並びに日本酒の輸出に関する情報 ・令和5年産購入実績 ・令和6年産購入実績（見込） ・令和7年産購入見込 ・令和8年産購入見込
調査実施月	令和6年7月	令和7年8月
結果の分析・評価	情報交換会において分析	
公表方法	農林水産省HP及び米に関するマンスリーレポート	
公表時期	・令和6年10月15日 （令和7年産酒造好適米の需要量（推計値））	・令和7年11月中旬（予定） （令和8年産酒造好適米の需要量（推計値））

注：令和7年度の数量ベースの回答率は、7年度調査の5年産需要実績を6年度調査時の5年産酒造好適米の全体需要量（推計値）で除して算出。

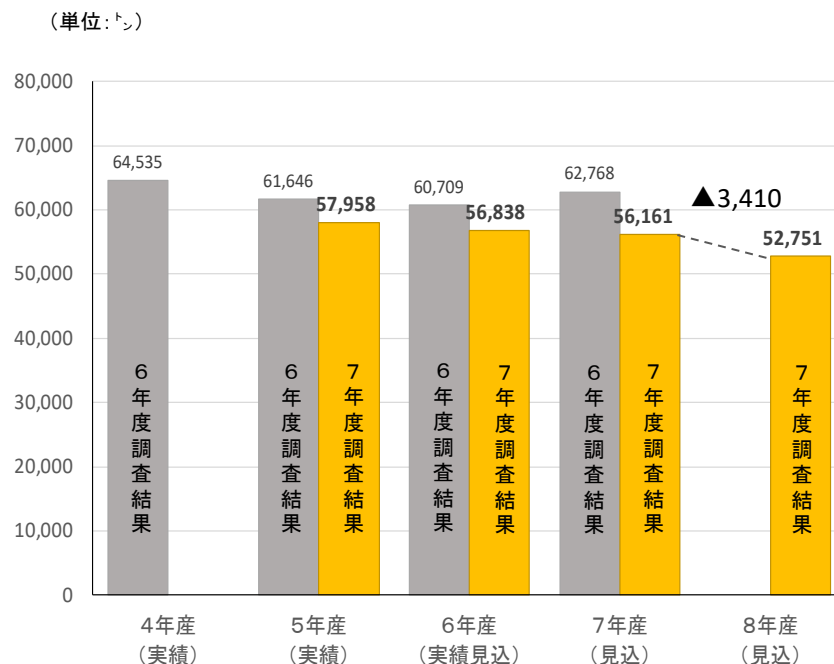
酒造好適米等の需要量調査結果概要

- 今年度の酒造好適米等の需要量調査において回答のあった酒造メーカーの令和8年産酒造好適米の需要見込みは、合計で58千トと令和7年産に比べて+4%増加するという結果。
- 令和7年産の需要量は、昨年度の需要量調査においては、令和6年産に比べて+1%であったが、今年度の需要量調査においては、令和6年産に比べて▲6%となっている。
- また、酒造好適米と併せて調査した加工用米の需要量については、令和8年産の需要見込みは、合計で53千トと令和7年産に比べて▲6%減少する見込みとなっている。

○ 酒造好適米の需要量調査結果



○ 加工用米の需要量調査結果



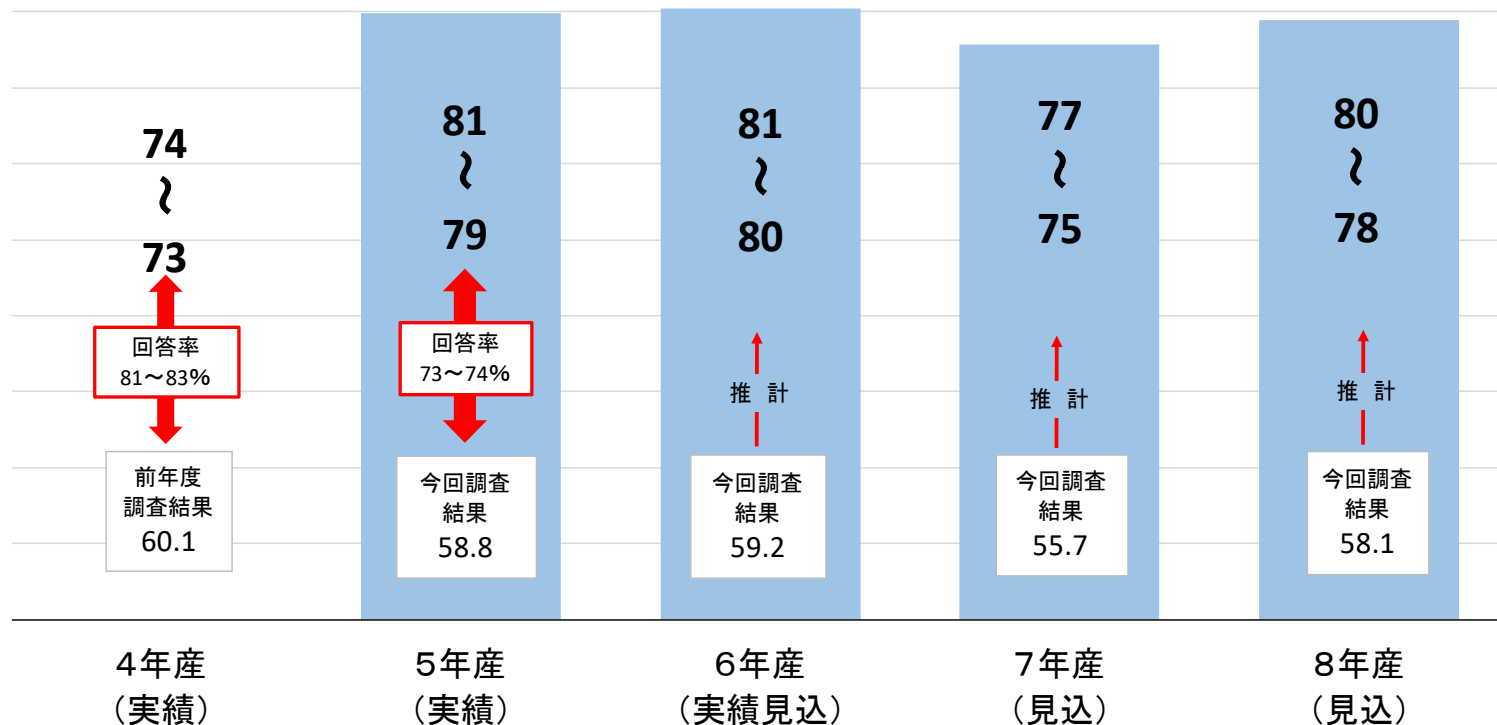
注: 6年度調査、7年度調査は、それぞれ客対数が異なるため、直接比較できないことに留意。

酒造好適米の全体需要量の推計

- 今回の需要量調査の回答率（数量ベース）は、約73～74%と推計され、この回答率を用いて全体需要量を推計すると、令和5年産は79～81千ト、令和6年産は80～81千ト、令和7年産は75～77千ト、令和8年産は78～80千ト程度と推計される。

酒造好適米の全体需要量（今回推計値）

（単位：千ト）

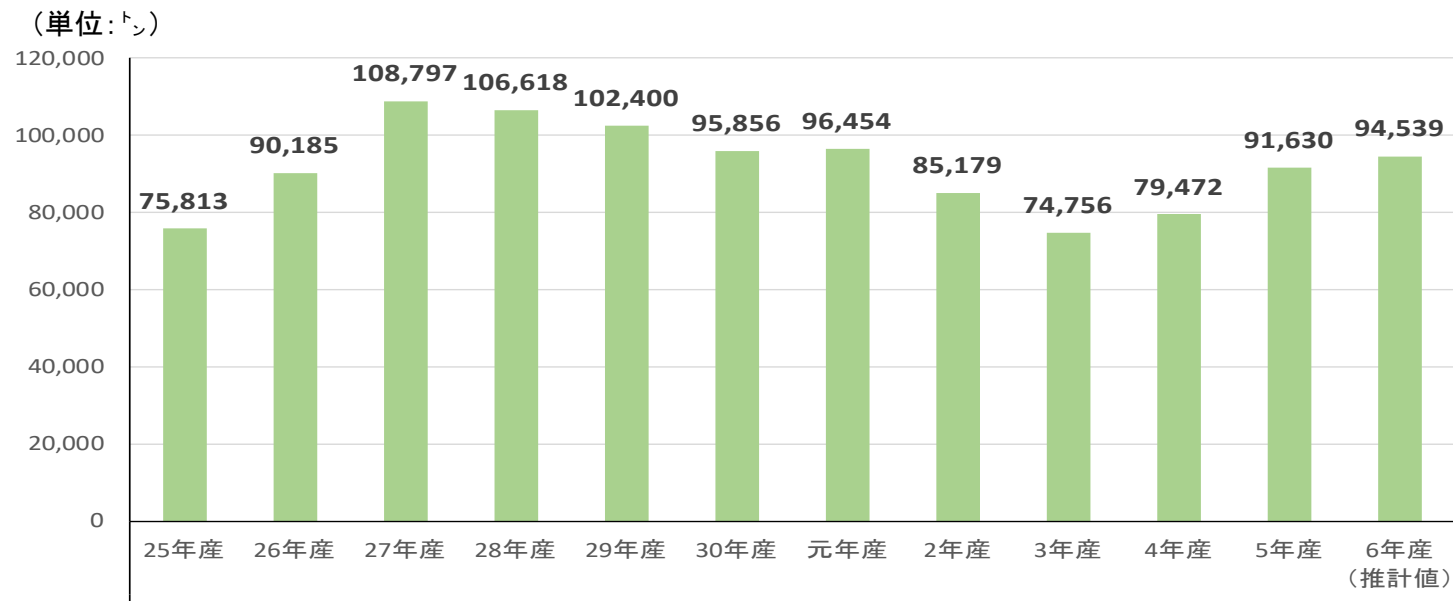


注：各年産の全体需要量（今回推計値）は、今回の需要量調査の数量ベース回答率が、令和5年産酒造好適米の全体需要量（79～81千ト）と今回調査の令和5年産の需要量（約59千ト）から約73～74%と推計されるため、各年産の今回調査結果の需要量を当該割合で除することにより算出。

酒造好適米の生産動向

- 酒造好適米の生産量（農産物検査数量）については、平成24年産から特定名称酒の増加等による需要の増加に伴って生産量が増加し、平成26年産で概ね酒造メーカーの希望に見合った生産が行われたと考えられる。
- 作付面積が増加し、作柄が良かった平成27年産をピークに生産量は減少傾向で推移し、令和2及び3年産は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響等により、日本酒の国内出荷量が急減したことから、生産抑制が行われ、生産量が大幅に減少。
- 令和4年産以降は増加に転じ、令和6年産（推計値）は、対前年+3千ト（+3%）の約95千トと増加が見込まれる。

酒造好適米の生産量（農産物検査数量）

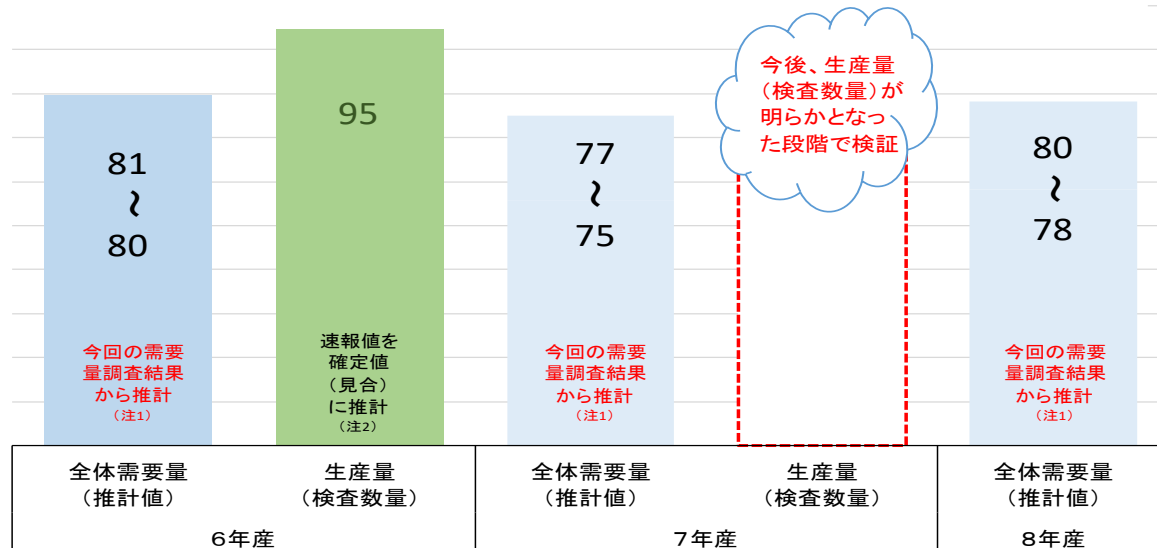


注：農産物検査数量（醸造用玄米）の6年産（推計値）は、令和7年3月31日現在の速報値を直近3カ年の3月31日現在の農産物検査の進捗率により確定値見合いに推計したもの。

酒造好適米等の需要量調査結果等に基づく全体需給の推計（試算）

- 今回の需要量調査によると、令和6年産の全体需要量（推計値）は80～81千トン程度、令和7年産の全体需要量（推計値）は75～77千トン程度、令和8年産の全体需要量（推計値）は78～80千トン程度と見込まれる。
- 令和6年産については、生産量（推計値）が全体需要量（推計値）を14～15千トン程度上回っているものの、生産及び実需の関係者からは、実際には集荷量のほぼ全てが酒造メーカーと結び付いており、過剰感はないとの声が多く、その差は全体需要量を聞き取り結果（回答率約6割）から推計していることによるものと考えられる。
- 令和7年産については、今後、生産量（検査数量）が明らかになった段階で検証する必要があるが、昨年の調査において推計した令和7年産の全体需要量が82～84千トンであったことから、元々想定していた需要量を十分に確保できていない状況があるのではないかと推察される。
- 令和8年産については、令和7年産の生産動向及び酒造メーカーからの最新の需要動向等を踏まえ、各産地において、今後、全体需要量の変動する可能性があることに留意するとともに、引き続き需要に応じた生産に取り組むことが重要。

（単位：千トン） 酒造好適米（醸造用玄米）の全体需給の状況



注1：各年産の全体需要量（今回推計値）は、今回の需要量調査の数量ベース回答率が、令和5年産酒造好適米の全体需要量（79～81千トン）と今回調査の令和5年産の需要量（約59千トン）から約73～74%と推計されるため、各年産の今回調査結果の需要量を当該割合で除することにより算出。

注2：生産量は、農産物検査数量（醸造用玄米）の値。ただし、令和6年産は、令和7年3月31日現在の速報値を直近3カ年の3月31日現在の農産物検査の進捗率により確定値見合いに推計。

産地別・銘柄別需要量調査結果等について

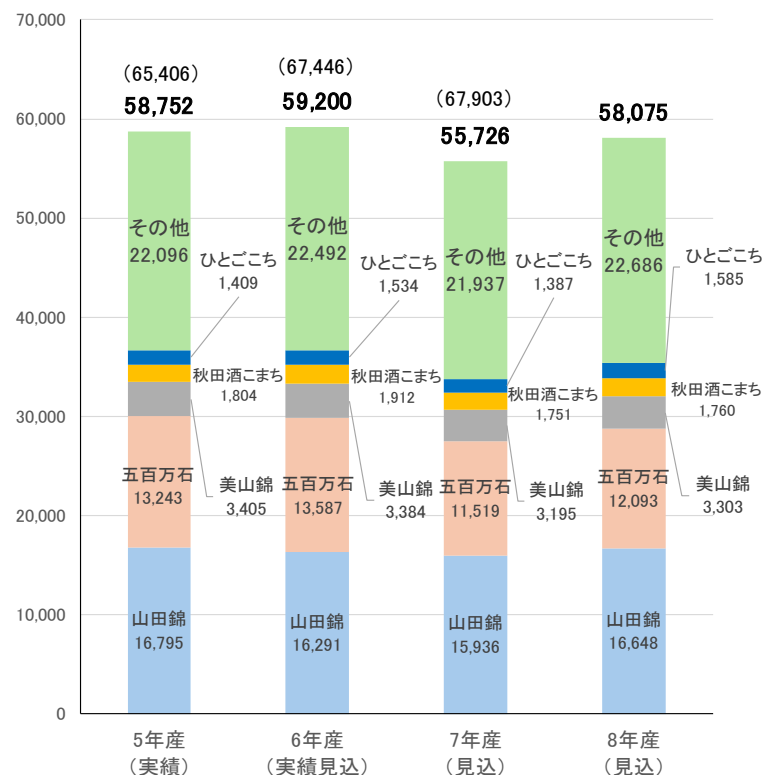
- 1 酒造好適米等の需要量調査結果によると、その需要量は、
 - ① 令和7年産については、令和6年産から減少
 - ② 令和8年産については、令和7年産からは増加するものの、令和6年産と比べては減少すると見込まれます。
- 2 こうした状況を踏まえ、各産地では、自らの産地・銘柄別の需要に応じた生産を図っていく必要があります。
このため、その判断指標として本資料では、
 - ① 各産地銘柄毎の需要量調査結果（酒造メーカーからの回答）及び各年産ごとの増減の動向
 - ② 主要産地銘柄の平成25年産～令和6年産の生産量（農産物検査数量）を掲載しました。
- 3 各産地においては、これらのデータ等を参考にしつつ、令和7年産の生産及び需要動向等を踏まえ、引き続き令和8年産の需要に応じた生産に取り組むことが重要と考えます。

酒造好適米等の需要量調査結果概要（銘柄別・産地別）

- 今回の調査における銘柄別の需要量は、山田錦が最も多く、次いで五百万石、美山錦、秋田酒こまち、ひとごちの順。産地別の需要量は、兵庫県が最も多く、次いで新潟県、長野県、秋田県、広島県の順。
- 主要な銘柄、産地の需要量は増加傾向にあり、令和8年産の全体需要量は、令和7年産に比べてやや増加。
- 令和7年産の需要量は、昨年度の需要量調査においては、令和6年産に比べて＋1％であったが、今年度の需要量調査においては、令和6年産に比べて▲6％となっている。

需要量調査結果（銘柄別）

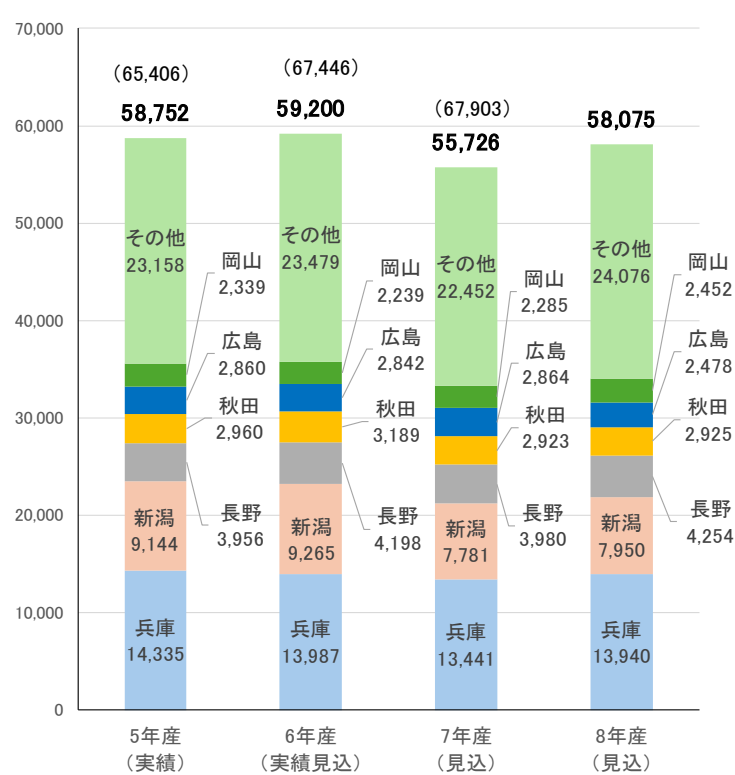
（単位：トン）



注：（ ）は前年度の需要量調査結果

需要量調査結果（産地別）

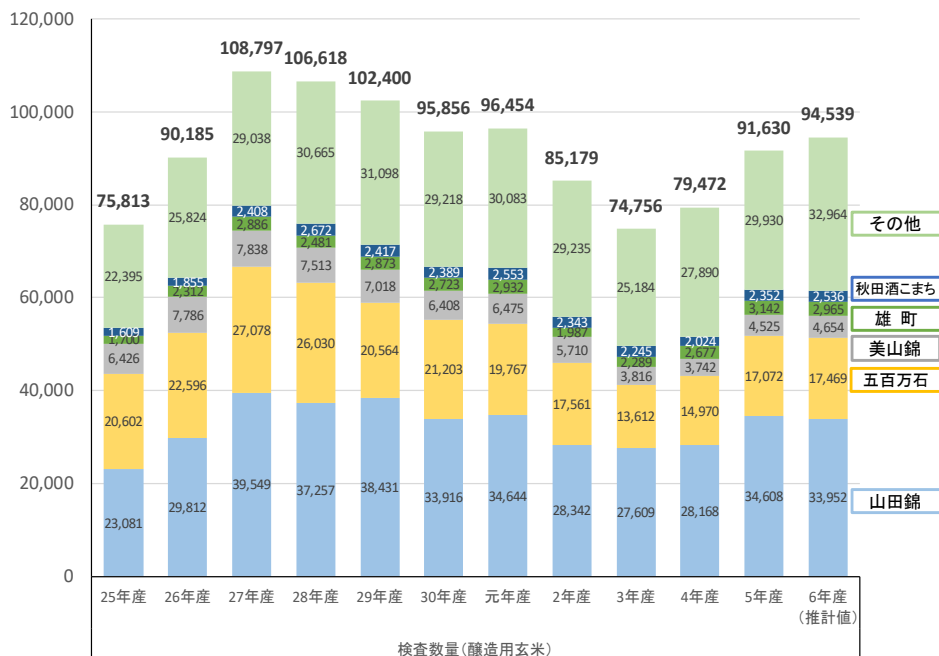
（単位：トン）



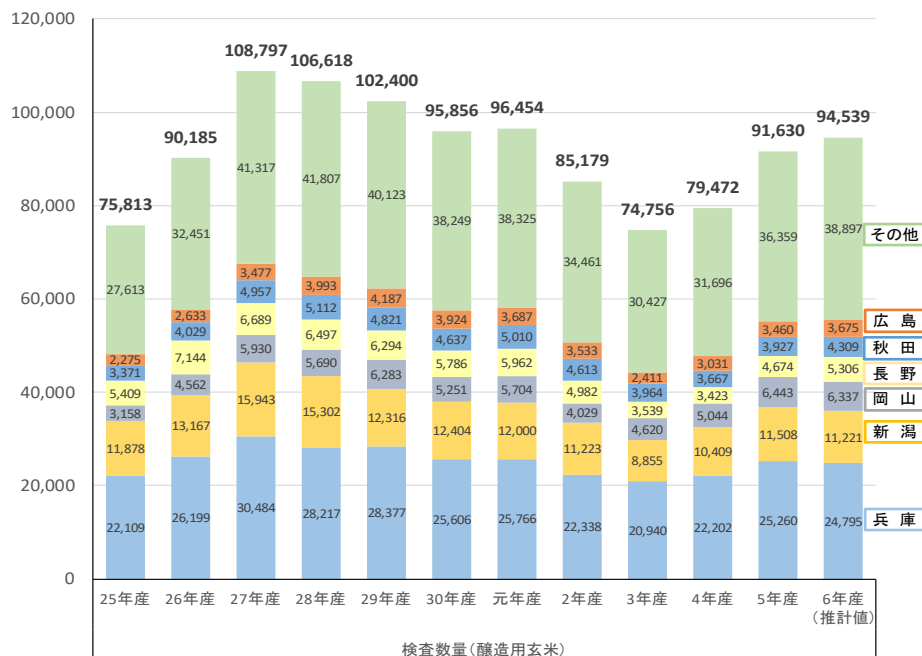
注：（ ）は前年度の需要量調査結果

- 酒造好適米の生産量（農産物検査数量（醸造用玄米））は、平成28年産以降、全体需要量が減少する中、産地において需要動向を踏まえた生産に取り組んだ結果、減少。
- 令和2及び3年産は、主要な銘柄、産地についても、新型コロナウイルス感染症拡大の影響等による需要減を見込んで、生産量が大幅に減少。
- 令和4年産以降は増加に転じ、令和6年産（推計値）は、対前年+3千ト（+3%）の約95千トと増加が見込まれる。

(単位: t)



(単位: t)

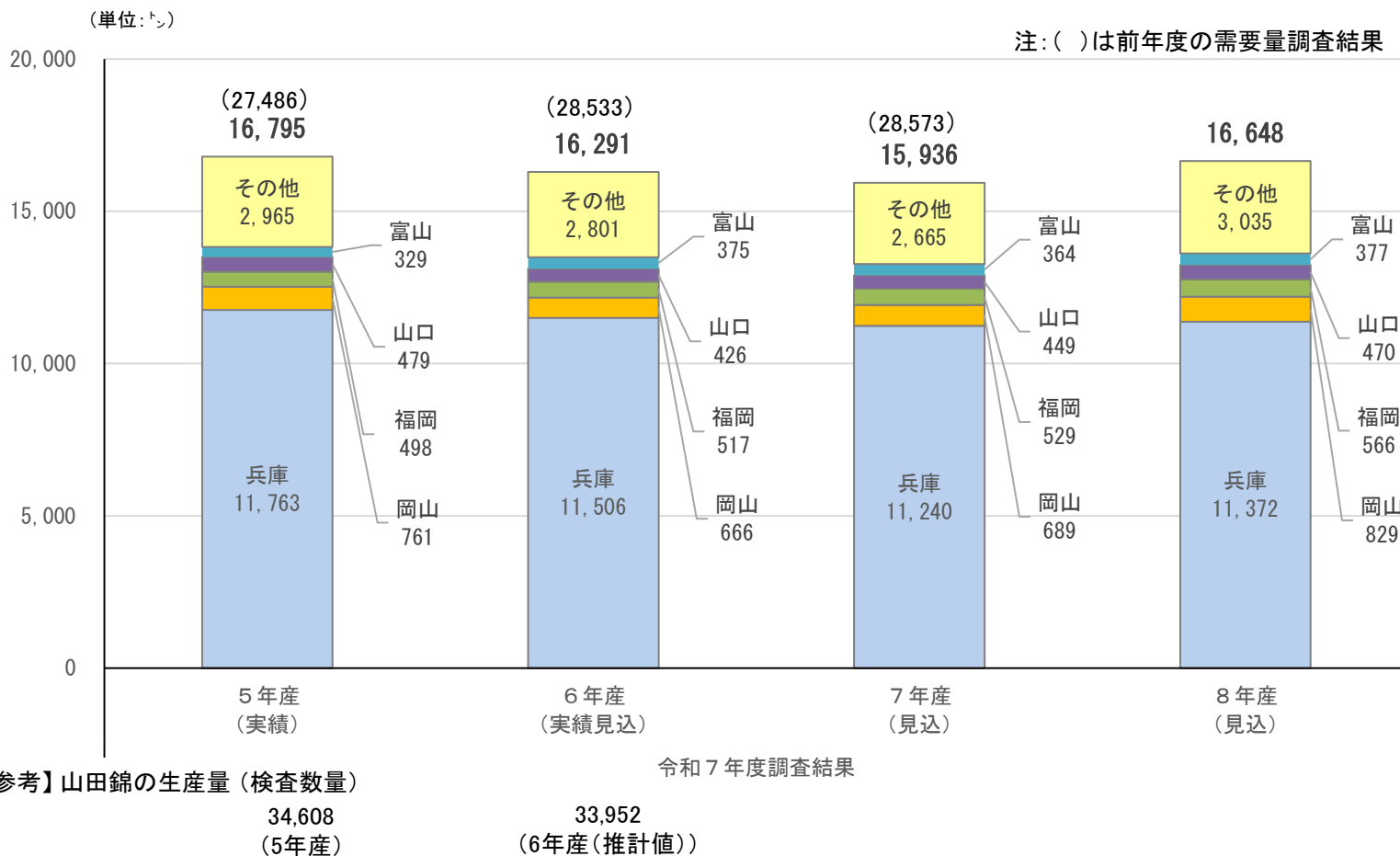


9

主な酒造好適米の需要量調査結果（山田錦）

- 令和8年産の山田錦の需要量は、令和7年産に比べて＋4％程度。
- 令和7年産の山田錦の需要量は、昨年度の需要量調査においては、令和6年産に比べて±0％であったが、今年度の需要量調査においては、令和6年産に比べて▲2％となっている。

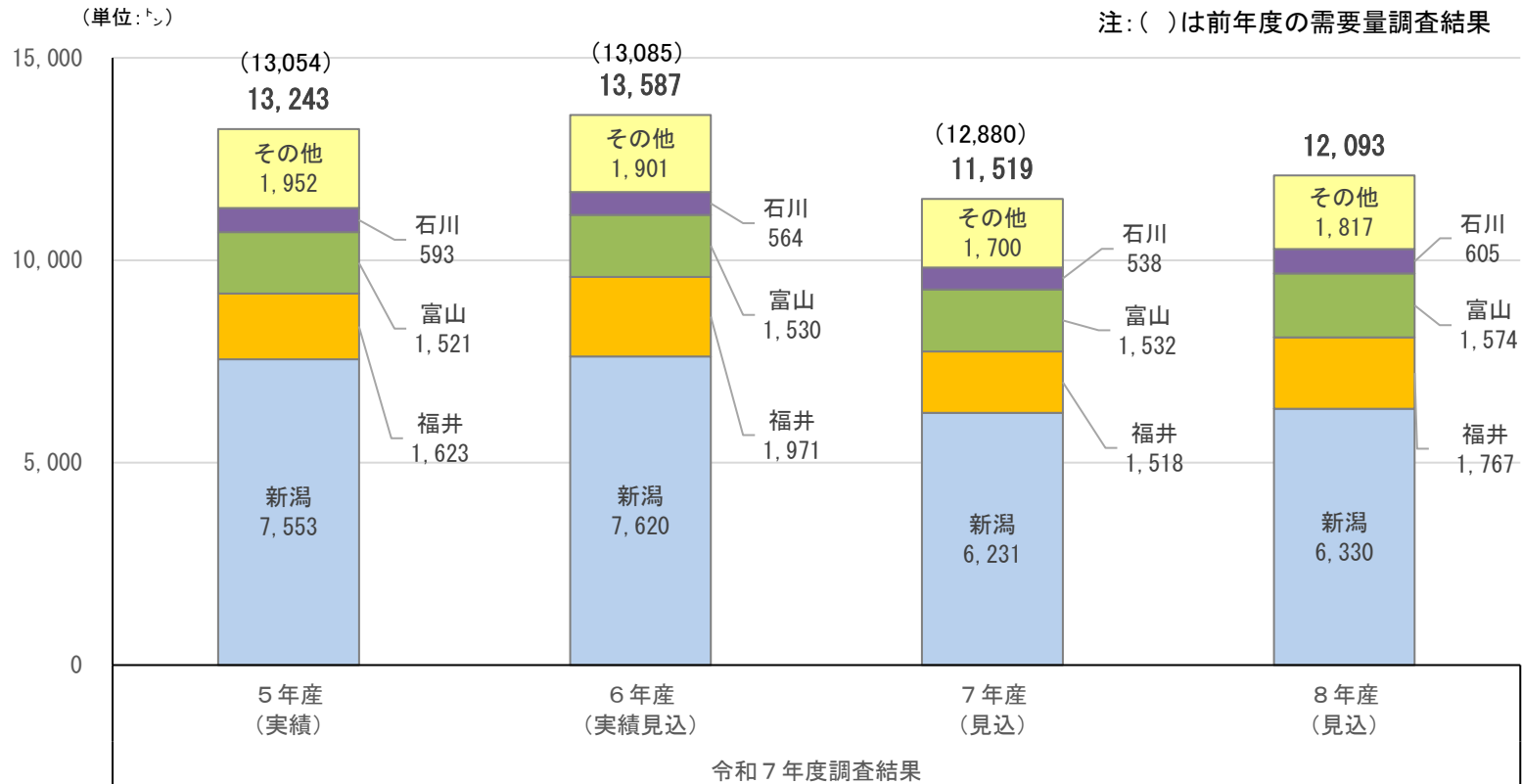
山田錦の需要量



主な酒造好適米の需要量調査結果（五百万石）

- 令和8年産の五百万石の需要量は、令和7年産に比べて＋5％増加。
- 令和7年産の五百万石の需要量は、昨年度の調査においては、令和6年産と比べて▲2％であったが、今年度の需要量調査においては、令和6年産に比べて▲15％となっている。

五百万石の需要量



【参考】五百万石の生産量（検査数量）

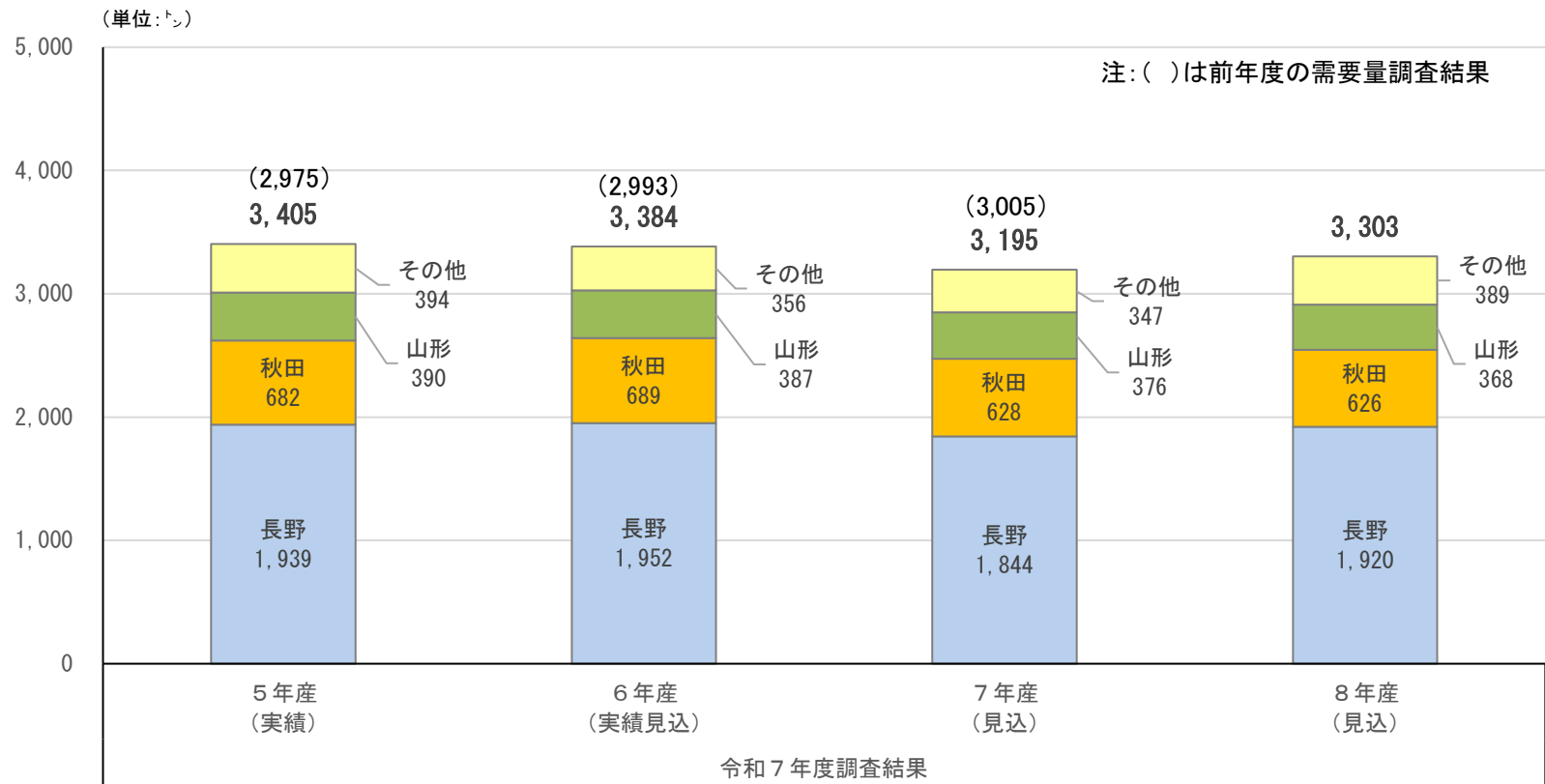
17,072
(5年産)

17,469
(6年産(推計値))

主な酒造好適米の需要量調査結果（美山錦）

- 令和8年産の美山錦の需要量は、令和7年産に比べて＋3%と同程度。
- 令和7年産の美山錦の需要量は、昨年度の需要量調査においては、令和6年産に比べて同程度であったが、今年度の需要量調査においては、令和6年産に比べて▲6%となっている。

美山錦の需要量



【参考】美山錦の生産量（検査数量）

4,525
(5年産)

4,654
(6年産(推計値))

酒造好適米等の需要量調査結果概要（輸出仕向量）

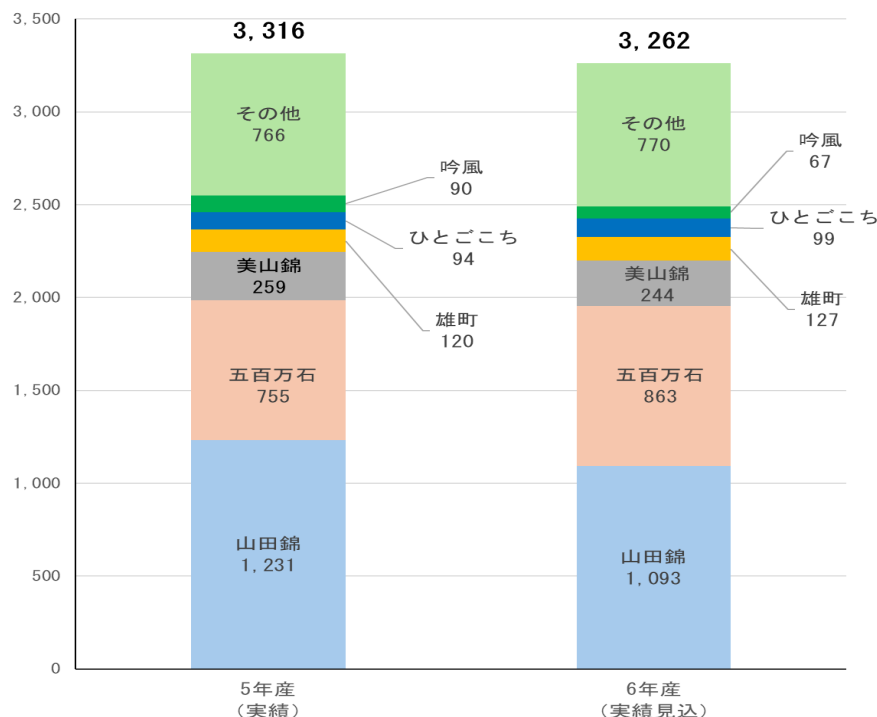
- 輸出仕向量は、輸出仕向割合の回答があった酒造メーカーの数を合計したもので、令和5年産では、酒造好適米は3,316ト（輸出仕向割合5.6%）、加工用米は3,651ト（輸出仕向割合6.3%）、令和6年産では、酒造好適米は3,262ト（輸出仕向割合5.5%）、加工用米は3,676ト（輸出仕向割合6.5%）であった。

※ 日本酒の輸出は行っているものの、輸出仕向割合が未回答の酒造メーカーの輸出仕向量は含まない。

- 銘柄別では、生産量の多い銘柄・産地の輸出仕向量が多く、特に山田錦の輸出仕向割合が高かった。また、産地別でも、生産量の多い兵庫、新潟などの産地の輸出仕向量が多かった。

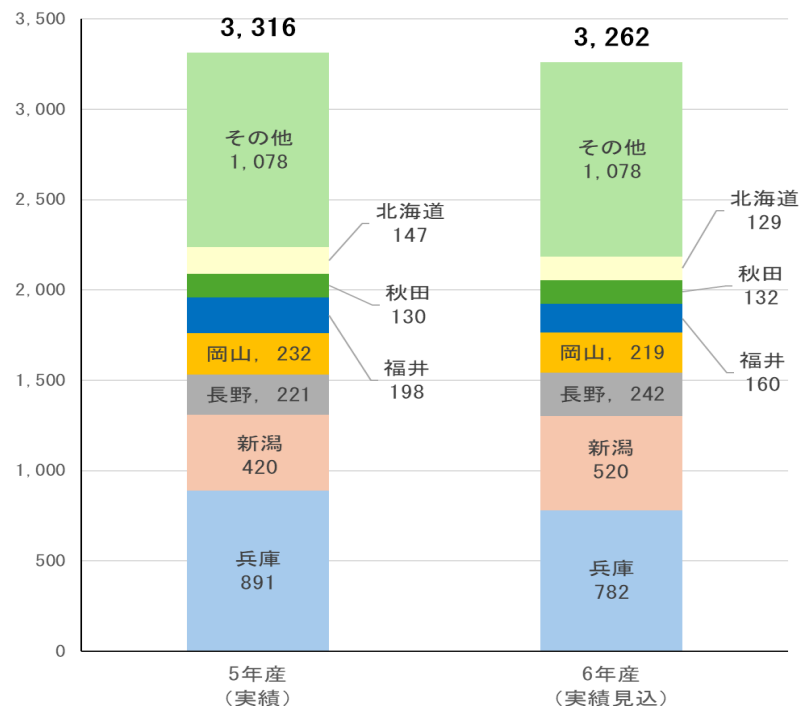
輸出仕向量（銘柄別）

（単位：ト）



輸出仕向量（産地別）

（単位：ト）



日本酒原料米の安定取引に向けた情報交換会等の実績と予定

- 酒造好適米の需要に応じた生産に向けて、生産及び実需の関係者による「日本酒原料米の安定取引に向けた情報交換会」を平成28年以降、毎年開催するとともに、全国の酒造メーカーを対象とした酒造好適米の需要量調査を実施し、調査結果等を公表しているところ。
- 令和元年度までは、6月に情報交換会において需要量調査内容等を議論、7月に需要量調査、9月に調査結果分析を酒造組合の原料委員会において確認いただき、10月に調査結果の公表を行っていたが、令和2年度から「情報交換会」については、需要量調査後に、需要量調査結果の分析、需要に応じた生産に向けた情報発信方法、需給均衡に向けた方策等を議論することとし、9～10月の酒造組合の原料委員会の開催に併せて実施している。

平成28年度～ 令和元年度

当年					翌年
6月	7月	8月	9月	10月	2月
情報交換会	需要量調査	需要量調査結果取りまとめ	需要量調査結果分析	需要量調査結果公表	生産状況公表

令和2年度～ 令和6年度

当年					翌年
7月	8月	9月	10月	3月	
需要量調査	需要量調査結果取りまとめ	需要量調査結果分析	情報交換会	需要量調査結果公表	生産状況公表

令和7年度 (予定)

7年	8年		
8月	10月	11月	3月
需要量調査	需要量調査結果取りまとめ	需要量調査結果分析	情報交換会
			需要量調査結果公表
			生産状況公表

関係者が取り組むべき3つの方策

- 平成28年6月20日の日本酒原料米の安定取引に向けた情報交換会において、今後、関係者が取り組むべき3つの方策について取りまとめ。
- 今後、より一層の酒造好適米の需要に応じた生産を実現するため、3つの方策の取り組みを推進していく必要がある。

「取りまとめ」の概要

	複数年契約の拡大 に向けた対応	作況変動に対応する 仕組みの構築	需要情報の提供体制の構築
今後の取り組み方向	・ 複数年契約に取り組むことにより、将来にわたって、酒造好適米の安定調達が可能となるため、各産地及び各酒造メーカーごとの判断により段階的に取り組みを推進	・ 安定供給が図られるよう、生産・需要者双方が連携してランニングストックを確保する体制を構築するため、米穀周年供給・需要拡大支援事業の活用等も含め、どういう対応ができるか検討	・ 酒造好適米の需要量見通し等を、国が情報を収集、整理し、本情報交換会の下に、日本酒造協同組合連合会原料委員会の委員を中心に構成する「原料部会」を設置し、分析・検討を行った上で、産地に情報提供